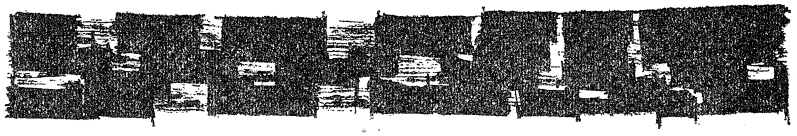


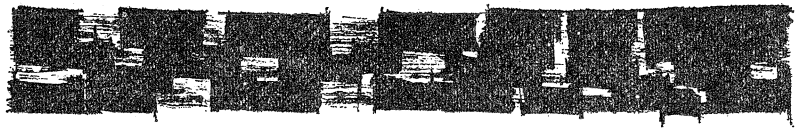
黒い海

（みずかみ　いさお）

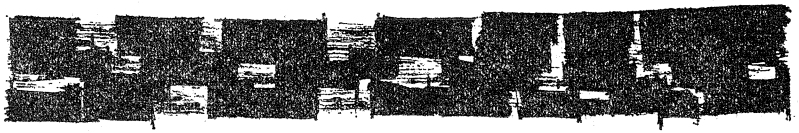
（神戸大学文学部国文学科）
水上　勲

動かぬ運河にそい
重油の臭う倉庫の傍をぬけ
錆びついて
今は動かぬクレーンを横に見ながら
点在する
人気ない漁民部落を
息をひそめ　獣のようにくぐりぬけると
不意に視界が開け
女の裸の屍のような砂浜のむこうに
黒い海が見えた
俺のめざす所がそこだ

べたべたと粘りつく八月の潮風がつらぬいていく
ああ　ここが昔のS海水浴場ね
連れの女がいう
こんなに海が汚なくなってはだめね
知らぬ顔して俺は砂浜を見渡す

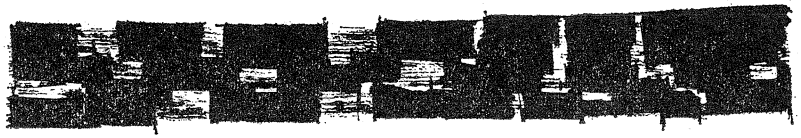


かって　ここにも小さな漁港があり
板作りの船つき場があったのだが
今は見えぬ
天候異変で曇天続きの
S海水浴場には人影ひとつない
それより海を見ましょうよ
海は変らないわ　いつまでも
揺れる髪を押え
女は遠く水平線にそって海を見渡す
あなたはそのことを確かめたかったんでしょ
　海が変らないってことを
そうか　そうだったか
俺の胸につきあげるものがあり
いや　違う
俺はそのために来たのではない
海ですら　もとのままではない
汚物にまみれ

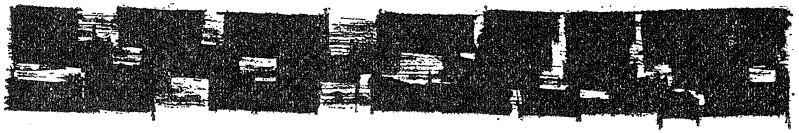


屈辱に波うつ海は昔通りではなく
ひたひたと黒い怒りに犯され
今は屍に等しい
俺の見たかったのは
あの漁民部落
人一人生きているとは見えなかった
あの部落の変貌だ
それを確かめたい
海のように荒れる気持をおさえ
ビニールをひろげて
砂浜に座りこんだ女を見捨て
俺は声もかけずに
部落へ戻った

誰かいるか
戸板をうちつけた入口は固く閉ざされ
裏へまわっても



唖のように
窓という窓すべて釘付けされている
どの家もそうだ
うづくまる村落集団に
俺はいらだち
思いきって
入口の戸板に手をかけ
強く引くと
湿気と塩分に犯された
焦茶色の板は意外にもろく
すぐに音たてて壊れた
井戸のように暗く穴をあけた
家の中をのぞくと
陰湿地帯に繁殖する
単細胞生物のような臭いがふきつけ
思わず錯覚にとらわれる
このような所に沼があるはずはない



声をかけるが
返事はなく
一歩中へ足を踏みいれようとして
不意に
俺はいいしれぬ恐怖にかられ
外へでた
見ると
うづくまる漁民部落は
褐色の砂の中へ
じりじり降下しはじめている
いつか
この部落も砂の中に埋没するに違いない
そう思うと
激しい何ものともつかぬ
衝動が俺をとらえ
一握りの砂をつかんで
空になげつけるが

強い風に吹きとばされ
手には何も残らぬ
耳に鳴る風に
俺は狂気じみた怨念を思い
何故か
何故彼らは海を残していったか
くり返し
黒い海にむかって問いつづける

連れの女の許へ帰ると
女はいつか
裸足で波うち際にたち
海に足をひたしている
俺のこころは
しだいにまっ黒な汚辱の念にひたされ
のけぞった姿勢のまま
悶絶に耐えて
部落をふりかえった